

# 「赤水図」の作り方 ②地図製作

## 1 地図を描く

収集した情報をもとに、地図を描いていく。はじめは半紙ほどの大きさの紙に日本図の輪郭を描き、修正を入れる。次は紙を貼り合わせ、しだいに大きな図に発展させていった。



## 2 地図を更新

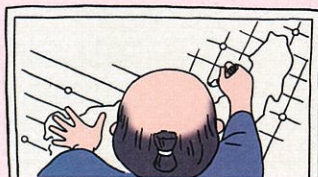
修正箇所は胡粉こほん（貝殻から作られた白色顔料）で塗りつぶしたり、紙を重ねて新しい情報を上書きしたりした。その作業は全国に及んでいたことが見て取れる。



高萩市歴史民俗資料館 所蔵

## 3 方格線（経緯線）を描く

緯度が記された横線（緯線）と、京都を基軸とした縦線（経線）を描く。経度の度数は定められていなかったため、度数は入っていない。



## 4 凡例を書く

縮尺はおおよそ130万分の1で、一文字の大きさが三里（約12 km）であること、地名の一文字目がその場所であることなどが記載されている。



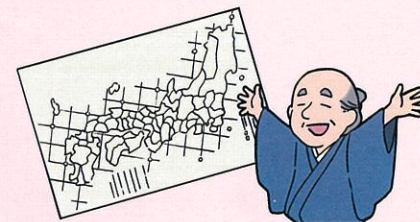
## 5 序文を書いてもらい 箔をつける

柴野栗山（後に寛政の三博士となる高名な儒学者）が序文を寄せた。地図を製作するのに20年余りの年月をかけたこと、家の前を通る旅人をもてなして郷里の情報を尋ね、幅広い地理情報を取得したことなどが記載されている。



## 6 日本地図完成

安永8年（1779年）「改正日本輿地路程全図」が完成。縦81.8cm、横131.0cm。実用性に富んだ「赤水図」は、明治初頭までの約100年間、ベストセラーとして版を重ねた。地名数も従来のものとは比較にならないほど多く、初版では約4,200、第二版では約6,000の地名が記載されている。



①情報収集②地図製作の工程を繰り返し、完成度をさらに高めた。